

《翻 訳》

宮澤賢治「雨ニモマケズ」をどうポルトガル語へ訳すか

—ベイヤ・インテリオール大学アントニオ・フィダルゴ教授との対話から—

Tradução portuguesa do poema de Miyazawa Kenji “Forte à Chuva” (Ame nimo Makezu): Uma tentativa elaborada através da conversa com o professor António Fidalgo da UBI

日 埜 博 司

キーワード

宮澤賢治 「雨ニモマケズ」 アントニオ・フィダルゴ教授

2004年度の在外研修先としてリスボア新大学海外歴史研究センターを選び、1カ年をポルトガルで過ごしたとき、日本語・日本文化について何かポルトガル語でお話しせよという誘いの声は何度か掛かった。そう頻繁な誘いでもなし、ポルトガルで好きなように勉強できることへのお礼のつもりで、そうした要望にはすべて快く応えることに決めた（時間の都合がつかないというエラそうな言い訳はできなかった。だって拘束されている時間なんかないのだから）。

社会科の特別授業として日本人の宗教性について話すように、との希望がポルトガル南部アルガルヴェ地方ロウレ市の高等学校から舞い込んだとき、これは困った、こんな分不相応なテーマに背伸びして応じてよいものかどうか、と迷わざるを得なかった。が、リスボア新大学の寄宿舎で数日かけ丹精込めてポルトガル語へ訳しておいた『いろは歌』全編、「祇園精舎の鐘の声」で始まる『平家物語』冒頭の一節、『梁塵秘抄』収載の今様数点など、あちらの高校生の前で朗詠し、そのエッセンスを、日本から持参した大して多くもない参考文献からかき集めた仏教の基礎知識で巧みに（？）脚色、課された責任だけはどうぞやらこうやら果たしたようであった。ただひとつ嬉しかったことに、日本語の主要“アルファベット”47文字を羅列しただけのあの「いろは歌」が深遠な仏教哲学を内包する美しくもみごとな一篇の詩を形成すること、冒頭から7字目ごとに文字を拾ってゆくと、何と「咎無くて死す」という“暗号”が浮かび上がること、など説明すると、驚きの声が生徒からも先生方からも上がった。

累次にわたり学内誌で連載してきたディエゴ・コリヤード『さんげろく』のポルトガル語全訳注を、東京の勉誠出版（旧、勉誠社）から上梓するため今、最終的準備にいそんでいるが、日本で出版する以上、全篇ポルトガル語で記述した注記の日本語要約を適宜繰

り入れざるを得ない。その取捨選択と再構成に難渋しているところだ。

たびたび記述してきたことであるが、カトリックの十誡に即して収載された日本人キリシタン信徒の懺悔（カトリック用語で正しくは告解）へ注記を施すに際し、常に配慮したことがひとつあった。それは、カトリックの価値観なり倫理観なりからは明らかに逸脱する日本人の風俗習慣や社会慣行（この“日本人”という言葉には本当はもっと厳格な定義を下す必要があるのだが、今その議論には深入りしない）に対し、日本にはそれらを合理化しさらにはときには正当化しさえするヨーロッパとは別個の倫理コードが厳然と存在することを、史料に即しつつポルトガル語で明らかにすることであった。

たとえばカトリックの第六誡をめぐって。それは「邪淫を犯すなかれ」というものだ。この第六誡を単純に定義するなら、婚姻の秘蹟によって結ばれた唯一正当な配偶者との間で、子孫を繁栄させるという狙いをもって（ここが重要なポイントらしいが、その行為に附随する肉体的快樂も強制排除して！）行なわれる性交以外、一切の行為を“逸脱”として容認せぬ、というに尽きるであろう。『さんげろく』にはすでに明らかにしたとおり、不義密通を皮切りに、墮胎・間引き・蓄妾・強姦・男色・肛門性交・自慰（男女とも。他人とペアになり、してやったりしてもらったりするものまで！）から、挙句の果ては獣姦に至るまで、カトリックの性倫理を真っ向からあざ笑うが如き日本人キリシタン信徒の赤裸々な性的“逸脱”のかずかずが告解の形式で列挙されている。

たとえば男色という同性愛行為について。これが表向き女色を禁ぜられた坊主の間で盛んであったことはよく知られるし、戦国期から江戸期にかけ武士階級に普通に見られた“悪風”でもあった。ところがこの行為は一面において、戦場でお互いに一命を賭し助けあい支えあう男同士の揺るがぬ精神的契りを保証するものであった、と氏家幹人という歴史家は説く。

男色をめぐって一面的な道徳に拠りかかり、ましてや個人的な好悪を基準として、その善悪を論じてもしようがあるまい。肝心なのは、カトリック倫理がいかにか唾棄すべき行為と見なしても、日本にはそれを合理化したり正当化したりする思考法もしくは倫理コードが別個に存在した、という事実を直視すること。そしてそれを明確に示す日本側史料なり研究成果なりをヨーロッパ人読者へポルトガル語に直して提示すること。及ばずながら私はそれに取り組もうとした。

前置きはこれくらいとして、今回は、宮澤賢治「雨ニモマケズ」のポルトガル語に直したそのとりあえずの成果をお目にかける。前掲『さんげろく』とはどうやらあまり関係はない。ただ、前段で述べたような経緯から日本語・日本文化をポルトガル語で説明するという試みを重ねていると、自然の勢いで、大好きな「雨ニモマケズ」へ辿り着いてしまった。

もっとも「雨ニモマケズ」をポルトガル語へ直そうとしたことには、多少タイムリーな事情もあった。

ポルトガルのベイラ・インテリオール大学 (Universidade da Beira Interior. UBI) は、毎年、「外国人のための夏季ポルトガル語集中講座」を主催している。UBI と本学とは 1993 年に学術交流協定を締結、本学から少数ではあるが質のよい留学生を送り込んできた。5 月初旬 UBI のあるコヴィリャンへ赴いた野尻俊明学長一行は協定更新の調印式を済ませ、前

記講座へ本学生も参加してよらしいという許可が下りた（この出張の顛末は随行者である日笠が広報誌『RKU Today』2008年夏号に記述した）。

元来この集中講座はEU圏の学生交流を主眼とする「ソクラテス・プログラム」の一環なのであるが、それに流通情報学部3年の村元マルコがただひとり自主参加してくれる。「くれる」と記すのは、マルコのおかげで大学は——というより私は、か——辛うじて面目を保つことができたからだ。せっかく野尻学長がコヴィリャンへ赴き、授業料免除の特典まで与えてもらったのに、集中講座への参加者は結局ゼロでした、では大山鳴動して何とやら（マルコよ、君はネズミではないぞ）、みっともないし、先方の厚意を裏切ること甚だしくはあるまいか、と少なくとも私はそう考えてきたのだ。

マルコはブラジルからの帰国子弟でポルトガル語は堪能、感心なことに日本語が非常にうまい。将来イスパニア語圏で働くことを願っているのも、イスパニアとの交流も盛んな（コヴィリャンから一番近い都会は、国境を越えたあの中世大学都市サラマンカではなからうか）UBIで人間関係を構築してくることは、彼の将来のキャリアへ大きく資するであろう、と信ずる。

この講座の実施責任者であるアントニオ・フィダルゴ教授（UBI 藝術文学部長）はヨーロッパ古典学者であり、詩人としてみずからの詩集数点を刊行してもいる。敬虔なカトリック信仰を持ちながら、異文化への柔らかなまなざしを片時も忘れない、という素敵な人柄だ。幸い私の知友でもあるから、マルコのため何かと便宜を図ってくれるであろう。業務命令でコヴィリャンへ赴くことになれば、あちらでフィダルゴ教授と賢治の思想と作品について意見交換するのを楽しみにしていた。あちらでじきじきに拙訳の添削をお願いし、美しい独立作品としての葡萄牙語版「雨ニモマケズ」を獲得してこよう、といういささか見え透いた下心を懐いて。

マルコは文字どおり自主的に（学内募集を断わって）ポルトガルへ赴くので、私がコヴィリャンへ出向く必要はなくなった。そこで今回は、これまでにフィダルゴ教授と電子メールをやりとりして練り上げた「雨ニモマケズ」葡萄牙語ヴァージョンをお目にかける。ささやかながら、更新されたUBIとの学術交流協定の果実第2号ということで（第1号はもちろんマルコの集中講座への自主参加だ）。

「雨ニモマケズ」原文の図版を掲げた後、フィダルゴ教授へお送りしたはなはだ辞書的な拙訳をフォントサイズ10で掲げる。フィダルゴ教授が送り返してくれた添削の内容をパラグラフごとに適宜説明する。その際それぞれの表現なり語彙なりを用いた経緯を記す（といっても多くの場合辞書的な表現を用いるしか能がなかった、という自己批判にすぎぬが）。

そしてまことに僭越ながらフィダルゴ教授の示教に対し改めて検討を加えたうえ、私の責任において、願わくは音読に堪えうるであろう「雨ニモマケズ」葡萄牙語ヴァージョンをフォントサイズ12で最後に掲げる。

宮澤賢治記念館（岩手県花巻市）を訪ねたとき、林風舎が復刻した宮澤賢治「雨ニモマケズ手帳」（抜粋復元版）を手に入れた。原文の図版はそこから採録する。記して御了承を乞う。

<p>一日 味 吟 ト 少 野 共 草 カ タ ハ</p>	<p>一 ツ エ エ ツ カ ニ ワ ラ ッ テ</p>	<p>決 之 子 國 大 ラ ズ</p>	<p>飲 ハ ナ ク</p>	<p>11子 毛 雨 之 毛 百 及 ノ 日 者 サ 之</p>	<p>マ ケ 又</p>	<p>夫 夫 ナ カ ラ ダ ヲ</p>	<p>二 毛 マ ケ ズ</p>	<p>三 毛 マ ケ ズ</p>
---	--	--	----------------------------	--	----------------------	--	----------------------------------	----------------------------------

<p>行 ソ テ 看 病 カ リ</p>	<p>東 ニ 病 氣 ノ コ ト モ</p>	<p>巾 サ サ 宜 二 ブ キ ノ</p>	<p>野 原 ノ 松 ノ 林 ノ 陰</p>	<p>ソ ニ テ ワ ス レ ス ノ コ ト ク ノ キ カ リ</p>	<p>ア ラ ン コ ル ヲ カ ニ シ コ ラ ヨ</p>
--	--	--	--	--	--

行 ツ	行 ツ		南 ニ	行 ツ	西 ニ
テ	ヨ ハ	死 ニ		テ	ツ
	カ ラ	サ ウ		箱 ノ	カ レ
	ナ ク	ア ハ		東 ヲ	夕 母
ト イ ヒ	テ モ	レ バ		カ 目 ス	ア レ ハ
				死 ヒ	

トイヒ	ミ シ	サ ウ	ト リ	マ ラ	三 ニ
	テ モ	オ ノ	オ ノ	ヤ メ	ケ ン
	ボ 	オ ノ	タ ク	カ ラ	リ ツ
	レ	ア ル	ハ 	ト ク	ワ
		キ	カ 	イ ヒ	パ
			レ 	レ 	ハ

十

南	南	南	南	南	南	南	南
無	無	無	無	無	無	無	無
容	容	容	容	容	容	容	容
立	立	立	立	立	立	立	立
行	行	行	行	行	行	行	行
空	空	空	空	空	空	空	空
持	持	持	持	持	持	持	持
隨	隨	隨	隨	隨	隨	隨	隨
		華	華	華	華	華	華
		經	經	經	經	經	經

クホ
ニメ
モラ
シ
モ
セ
ス
ワ
カ
ウ
イ
モ
フ
ハ
タ
ハ
イ
タ
イ
ハ
ニ

FORTE NA CHUVA

Miyazawa Kenji

Forte na chuva;

Forte no vento;

Forte contra o calor do verão e a neve,

Ele é saudável e robusto.

* 「マケズ」に形容詞“Forte”を宛てたのは、実は英語版「雨ニモマケズ」に用いられる“Strong”に対応させても差し支えないと考えたため。この英語訳を耳にしたのは2008年4月20日（日曜日深夜。実際は21日）放映のNHK番組 *Begin Japanology* においてである。ただし、みずからの日本語学習の過程で賢治の作品に親しんだ経験をお持ちの同僚デイヴィッド・ハリー・シャピロ先生（米国人）へお伺いを立てたところ、“Strong”ではイメージを伝えきれていない、「挫けぬ」というような意味の形容詞を用いるほうがいいのではないか、という御意見であった。

「雨ニモ」に対応する前置詞＋定冠詞の箇所を“na”（前置詞“em”＋女性定冠詞“a”）にしたのも、実は英語訳“Strong in the rain”からの連想なのであるが、フィダルゴ教授はここを“à”（前置詞“a”＋女性定冠詞“a”）へ修正した。「雨の中で」ではなく「雨に対して」という感じ。「雪」と「夏ノ暑サ」の順序を逆にしたのは音読に際しての心地よさに配慮した、というまったく主観的な判断である。

Livre dos desejos,

Nunca tem um ataque de cólera,

E sempre esboça um sorriso tranquilo.

* 「決シテ瞋ラズ」を‘Nunca tem um ataque de cólera’と、「イツモシヅカニ ワラッテ /キル」を‘sempre esboça um sorriso tranquilo’とそれぞれ訳したのは、まあ誤解は招かぬにせよ、まるで“辞書的”であって藝がなくお恥ずかしい。後者に関してフィダル

ゴ教授は ‘E (nos lábios) sempre tem um sorriso tranquilo’ と直してくれた。英語訳は ‘He always has a smile on his lips’ である。日本語では「微笑む」という行為に、「白い歯」か何かをイメージすることはあっても「唇」を連想することはないのではないか。英語もポルトガル語も「唇」という語彙を「微笑む」という行為を表現するときに用いるのはおもしろい。

言葉は変化する“ナマモノ”であるからやや古くて参照するには少々憚られるのだが、手許にフランシス・J・クディラ/羽鳥博愛『英語発想IMAGE辞典 *English Expressions Based on Metaphorical Images*』（朝日出版社, 1984年）という本がある。この本の「LIPS・唇」の項を見たが「微笑む」を含む例文は掲載されていなかった。

Come, por dia, quatro gō de arroz integral, miso e um pouco de legumes;
Sem ter em conta de si próprio,
Vê e ouve bem,
Entende bem,
E não se esquece.

* 「アラユルコトヲ/ジブンヲカンジョウニ/入レズニ」について言えば、なるべくオリジナルに即した表現を試みたいところだ。フィダルゴ教授は “sem se vangloriar”（自惚れることなく）と直してくれたが、ちょっとこれは違うように思われる。‘Não se tem em grande conta’（自分自身を大して尊重することもない）という訳はどうだろう、という代案を提示してくれた。この “conta” はもともと「勘定（書）」という意味であるから、オリジナルとは雰囲気のみならず語彙の上からも調和しているし、しかも充分 understandable であろう。「ヨク/ミキキシ/ワカリ/ソシテ/ワスレズ」へ掛かってゆく副詞句として処理するため “Sem se ter em grande conta” とする。

Vivendo num colmo que se encontra em sombra do pinhal no campo,
Se está uma criança doente no Leste,

Vai lá e toma cuidado dela;
Se está uma mãe cansada no Oeste,
Vai lá e carrega a sua gavela de arroz às costas;
Se está uma pessoa morrente¹ no Sul,
Vai lá e diz-lhe: “Não tenhas medo”;
Se tem lugar uma briga ou demanda no Norte,
Aconselha que suspenda tudo por serem tolices as tais coisas.

* 「野原ノ松ノ林ノ蔭ノ」という「ノ」の繰り返し。「ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なるひとひらの雲」(佐佐木信綱)を連想させる。助詞「ノ」の繰り返しが——あくまで特例的に——及ぼす忘れがたい効果。正銘の翻訳者なら、ここで「ああすばらしい」としばし感動に浸った後、それぞれの「ノ」が有する異なる意味を分析する作業へただちに移行せねばならぬ。間違っても——原文に「ノ」が繰り返されているからといって——前置詞“de”の羅列に陥らぬようにするために。

この後に「東ニ病氣のコードモアレバ」「西ニツカレタ母アレバ」「南ニ死ニサウナ人アレバ」「北ニケンクウヤソショウガアレバ」でそれぞれ始まるあの有名な“条件文”が来る。私はこの“条件文”すべてに叙実法(直説法)現在形の動詞を用いた。これに対しフィダルゴ教授は、こうであればこうだよ、というビジネスライクな割り切りの臭いがする条件法ではなく、ここは叙想法(接続法)未来形を用いる仮定法でゆくのがよろしかろうと指摘してくれた。まったくそのとおりだと思う。こうであればこうでありたいものだなあ、という賢治の祈りと憧れをポルトガル語文法の上に少しでも反映させたいのなら、やはりここは仮定法未来を用いるに如くはなしであろう。4度繰り返される「行ッテ」にも賢治の切願がこもっているであろう。それだけにポルトガル語の朗詠にも力がこもらねばなるまい。私はこれをすべて“Vai lá”(そこへ行って)で統一する。オリジナルには「ソコへ」など書かれていない、なぜか、と問われればそのほうがリズムもスワリもいいから、と答えるしかない。

そのほか辞書的に正しくとも詩作に用いる語彙としてはあまりよろしくない、ある

¹ 「死ニサウナ(人)」を表現するのに動詞“morrer”の形容詞“morrente”は用いない(フィダルゴ

いはポルトガルでは使わない、あるいはこの語彙のほうがずっとわかりよい、とフィダルゴ教授によって指摘された箇所を、ほぼその指摘どおり訂正する。

「ツマラナイカラ/ヤメロトイヒ」の「イヒ」について一言。ここに見えるとおりに、私はこれを「勧告（忠告）する」という感じの“Aconselha”（規則動詞“aconselhar”の叙実法 3 人称現在）と表現したのであるが、フィダルゴ教授は“Diz”（不規則動詞“dizer”の叙実法 3 人称現在）でも“Aconselha”でもよいが、と前置きしたうえで、“Pede”（不規則動詞“pedir”の叙実法 3 人称現在）と訂正してくれた。これなら「(高飛車に) 言い渡す」という語感でも、文字どおり「アドバイスする」という雰囲気でもなくなる。別段頭を下げる必要もないのにわざわざ腰をかがめて「オネガイダカラヤメテクレ」と言っている感じだ。賢治の世界としてはこちらこそがよりふさわしいように思える。

Derrama lágrimas por ocasião da seca;

E anda sem saber que fazer aquando dos estragos do veranico² frio.

É chamado de um burro de carga por todo o mundo;

Nem por isso é elogiado;

Nem aflige outrém...³

* 「ヒドリ⁴ノトキハ/ナミダヲナガシ」の「ナミダヲナガシ」、それから「サムサノナ

教授の教示による)。

² 私が『現代ポルトガル語辞典』（改定版、池上岑夫/金七紀男/高橋都彦/富野幹雄/武田千香共編、白水社、2005 年）に就いて調べた“veranico”という単語はフィダルゴ教授によれば「存在しない」。ブラジルのそれもかなり地方的な語彙か。教授はそのような（少なくともポルトガル人には）イメージ喚起力のない語彙を用いるよりは、いっそ「霜害」と言い切ればどうだと提案してくれた。なるほどと思う。東北地方にたびたび生じた冷夏の災害に霜害が含まれるかどうか（含まれるであろう、たぶん）、を細かく穿鑿するより、ポルトガル人読者に「サムサノナツ」の惨害を具体的かつくつきりイメージさせること、確かにこれのほうが大事だと思考する。

³ 「クニモサレズ」についてフィダルゴ教授は拙訳を訂したうえで代案を幾つか提示してくれた。‘Ninguém lhe dá muita importância...’（誰も彼を大して重要視しない）あるいは ‘Ninguém se preocupa com ele...’（誰も彼のこともなんかつくろく構いはしない）など。

ツハ/オロオロアルキ」の「オロオロアルキ」は、いずれも辞書的に直したものをフィダルゴ教授に見てもらった。特に「ナミダヲナガシ」と「オロオロアルキ」というふたつの動詞に関しては、原語をなるべく活かしたい、あるいは説明過剰でややくどくなっても構わない、と実は今でも思っている。しかしここは、フィダルゴ教授という正銘のネイティブの訂正にやや不承不承ながら一旦は従い（下記のとおり）、再訂の余地も残しておくことにする。

⁴ 「雨ニモマケズ手帳」には紛れもなく「ヒドリ」と書いてある（図版参照）。これは中央の研究者や歴代の賢治全集編纂者（賢治の弟清六を含む）によって誤記と見なされ「ヒデリ」（日照り＝旱魃）と校訂されてきた。私もそれに仮に従うが、この定説に対し、主として盛岡圏の方言——日埜は方言より“生活語”という言葉を使いたい——使用者から近年異議が提出されている。すなわち「ヒドリ」は賢治の誤記などではなく、あくまでその原語のまま解釈しうるしそうすべきだ、というのだ。私はこの問題に関しまったくの門外漢であるから議論に加わらないが、異議申し立てのポイントは次の2点に集約されるようだ。

①「ヒドリ」は日雇い仕事の「日取り」を意味するのであって、「ヒドリノトキハ」は「日雇い仕事をせざるを得ぬような暮らしの厳しいときは」と解釈すべきである（この意見は花巻農学校における賢治の教え子のひとりが、農家にとって「日照り」はあくまで歓迎すべきものであるとの観点から1980年代後半に唱えたものだそうだ）。

② 2004年9月14日付け『盛岡タイムス』に掲載された「盛岡弁に隠された先人の英知に迫る」という記事で岩手県滝沢村在住の自営業の男性（この人は賢治の弟清六や詩人森荘巳池と親交があったという。ふたりとも賢治全集の編纂に永く深く関わった人物）は次のような証言を行なった。

「ヒドリ」は、盛岡から南、矢巾・日詰・石鳥谷・大迫・花巻の似内^{にまな}で昔使われた方言である。猛暑・炎熱によって目が炎症を起こし、「涙がボロボロと流れて苦しくなる」症状を電気溶接工は今も「ヒドリマゲ」と呼ぶ。その「ヒドリ」が「ヒデリ」へ“改竄”されてしまったことに関し男性は次のように語る。

「方言の解釈は、その土地の風習風土から生まれた言葉（方言）や、通称の土地名など熟知しないと正しい意味がくみ取れないもの。他県の賢治研究者は方言の発音語呂を共通語に結び付けて意味を重ね合わせて、自己流に解釈された見本だと、両氏〔清六・森の両氏——引用者注〕ははっきり言っていやんした」

やや判りづらいところもあるが、つまりこういう論旨であろうか。れっきとした岩手方言のつもりで賢治が誤りなく用いた「ヒドリ」を方言に無知な県外の賢治研究者が勝手に「ヒデリ」という共通語へねじ曲げた。「ヒドリ」と「ヒデリ」。両者は意味において決定的な隔りがあるとは言えまいが、方言は土地土地で異なる風習・風土の産物であるから、「ヒドリ」というその微妙な“生活語”の味わいを共通語とやりに壊されたくない——。そのような発言を清六・森の両氏は私の前ではっきり行なったのだと。そして男性は記事をこう結んでいる。

「教科書にも『雨ニモマケズ』は『ヒデリ（日照り）』と書かれているが、原書原文のまま『ヒドリ』に復権させて、正しい語句と意味の賢治作品を受け継がせたいと提唱しやんす」

私はポルトガル語のネイティブにはなりたくともなれない。でも日本語のネイティブではある、と——多少の自負とともに——思っている。だから訂正後に見える“Chora”（動詞“chorar”の叙実法3人称現在）だけで、滂沱たる「ナミダ」が頬を伝う様子を読者にイメージさせうるのか、“fica perdido”だけで、オロオロとさまよい「アル」ク様子までを髣髴とさせうるのか、など、非ネイティブのブンザイでいろいろ余計なことを考える。前記「ナミダヲナガシ」と「オロオロアルキ」に相当する下線部、私の“原案”ではやっぱり駄目か。

Isto é o tipo de pessoa que eu gostaria de ser.

* 「サウイフ/モノニ/ワタシハ/ナリタイ」。Begin Japanology では‘This is the kind of person I want to be’ と朗読されるのを聴き取ることができた。葡萄牙語ヴァージョンでは「そうになりたいものだなあ」という謙虚な祈りの気持ちを賢治が懐いていたものと考え、婉曲用法を用いることでフィダルゴ教授と意見が一致した。音読に際しての響きもリズムもこちらのほうが良さそうだ。「不規則動詞“Querer”+不定詞“ser”」もしくは「規則動詞“Gostar”+前置詞“de”+不定詞“ser”」の方程式を用いる。婉曲表現とするには“querer”なら不完了過去形に、“gostar”なら過去未来形に活用させるのが一般的だ。

FORTE À CHUVA

Miyazawa Kenji

Forte à chuva;
Forte ao vento;
Forte no calor do verão e à neve,
Ele é saudável e robusto.

Livre de desejos,
Nunca se irrita,
E (nos lábios) tem sempre um sorriso tranquilo.

Come, por dia, quatro gō* de arroz integral, miso e um pouco de legumes;
Sem se ter em grande conta,
Vê e ouve bem,
Entende bem,
E não se esquece.
* quatro gō: 720 centilitros.

Vive numa cabana de colmo (que fica) à sombra do pinhal no campo,
Se estiver uma criança doente no Leste,
Vai lá e cuida dela;
Se estiver uma mãe cansada no Oeste,
Vai lá e leva-lhe às costas os molhos de palha de arroz;
Se estiver uma pessoa a morrer no Sul,
Vai lá e diz-lhe: 'Não tenhas medo';
Se houver uma briga ou processos em tribunal no Norte,
Pede às pessoas que parem com tais tolices.

Chora quando chega a seca;
E fica perdido diante dos estragos das geadas de verão;
Todos lhe chamam burro de carga;
Ninguém o elogia;
Ninguém o leva a sério...

Este é o tipo de pessoa que eu queria ser (gostaria de ser).